

鶴嶺女学校について

二見剛史

はじめに

本稿は、鹿児島県中等教育史研究の一環をなすものである。筆者は、先に、女子教育を中心として本研究の序論的考察を行なった⁽¹⁾。本稿はそれに続くものであり、同時に、本県女子教育の一命脈といふべき鶴嶺女学校についての概観的考察である。したがって、内容構成上、引用資料に多少の重複部分が生ずることを、序めお断わりしておきたい。なお、本稿を草する段階で、鹿児島玉龍高等学校の重要書類の中に、鶴嶺女学校創立時以来の学籍簿等が



島津治子

大量に保管されていることが判明した⁽²⁾。その分析は日数を要するので本稿では残念ながら割愛せざるを得ない。また、同窓会が組織されており、鶴嶺関係の生存者⁽³⁾から当時の模様を教えてもらう機会も作れそうであるが、まだ実現していない。いずれにしても、本研究には今後検討されるべき課題を数多く抱えているわけであるが、他日を期し、まずは手許にある文献をもとに概観したいと思う。

一、鶴嶺女学校の誕生

鶴嶺女学校の創立は明治二十九（一八九六）年十二月二日とされている。そもそも、鹿児島県における女子中等教育の草分けは、明治八年、鹿児島市の天文館跡に設けられた小学正則女子講習所であろう。これは翌年女子師範学校と改称されたが、西南の役により八ヶ月間閉校したあと種々の変遷を経て明治二十年三月、鹿児島県師範学校女子部となつたとされる。⁽⁴⁾ 鶴嶺女学校の『沿革史』にはつぎのように記されている。⁽⁵⁾ 「……明治二十年師範学校令ノ改正ト共ニ師範学校ハ尋常師範学校ト改称セラレ生徒ハ僅ニ二学級ヲ收容スルコトナリシヲ以テ従来收容セラレタル多数ノ生徒ハ退学ノ止ムナキ事情ニ遭遇セリ時ニ当市ニ野守峯子女史ノ家塾アリ此等不幸ノ生徒ハ多ク此家塾ニ……入り又地方有志富豪ノ子女モ多ク此ニ集マリ裁縫刺繡押絵生花茶ノ湯音楽等ノ技芸ヲ学習……」した、と。この野守塾は旧制第七高等学校造士館近くの二の丸と称する場所に設立された模様であるが、その規模、教育内容について詳しいことはまだ判っていない。裁縫を中心とした小さな家塾であつたと想像される。しかし、当時の鹿児島にあつてはこの種の塾が最良の女子中等教育機関であり、良家の子女が新しい時代を目指して謂集したことであろう。本富安四郎の『蔭摩見聞記』によれば、「城山一敗始めて関門を開て、世間を眺め、顧て深く世の進歩に後れ居たるを発見したり、爾来、銳意学事を勧め⁽⁷⁾」とあり、明治十年代、二十年代の様相が窺える。当時、名のり出てきた私立学校を列挙しておく、明治十一年共立学舎、十五年三州義塾、十七年鍍鏤塾、十八年博約義塾、二十一年講教義塾、二十二年には妥嶺女学校と鹿児島高等簿記学校、二十三年成淑女学校、二十四年鹿児島女学校、二十五年山口女学校、二十七年鹿児島女子徒弟学校（のちの女子興業）と続くようであるが、各校についての研究はまだ進んでいない。この他にも有名無名の私塾が簇生したと考えられる。野守塾もその一つであつたらう。

「鶴嶺沿革史」には次のように書かれている。「明治二十九年ニ至リ同女史（野守峯子）嫁シテ当市（鹿兒島市）ヲ去ルニ及ビ從学ノ子女ハ其師ヲ失ヒ殆ンド途方ニ迷ハントスルニ至レリ是ニ於テカ此等ノ子女ハ同志相謀リ土持肇氏宅ヲ借り多クハ此ニ寄宿シ互ニ研鑽シ来リシモ之ヲ統督スル者ナク亦何等規則ノ制裁ナキヲ以テ島津サエ子女史萩原英子女史等主唱トナリ起稿ヲ町田佐熊氏ニ託シテ規則ヲ制定シ鶴嶺女学校ト名ツケサエ子女史ヲ校長トシ鹿兒島市ノ認可ヲ得茲ニ漸ク学校ノ形式ヲ備フルニ至レリ」と。野守塾から鶴嶺女学校への脱皮はかくしてなされたのである。時に明治二十九年末であつた。原文は続いている。「然レトモ当時猶ホ裁縫生花茶ノ湯等ノ技芸ヲ専修スルニ過キザリキ、當時ノ先覚者タル町田実一氏特ニ本校ノ為メニ尽力スルコト、ナリ島津サエ子女史萩原英子女史ヲ助ケ鹿兒島県師範学校教諭青木文蔵県視学黒川澄江鹿兒島市高等小学校長上床惟為ノ諸氏ヲ顧問ニ囑託スルニ至レリ此等顧問諸氏ハ先ズ規則ヲ修正シ学校組織ノ整備ヲ謀リ本料及ビ裁縫専科ノ二部ヲ置クコト……」⁽⁹⁾となつた。この二部制は明治末まで続いている（表1を参照）。「更ニ内容ノ充実ヲ謀ラントシテ先ヅ教員ノ選任ニ着目シ市内小学校訓導中ヨリ吉国ノリ子・木村ヨシ子⁽¹⁰⁾両女史ヲ選拔任用シテ専ラ教養ノ事ニ当ラシメ又熊本尚綱女学校出身松岡タツ子女史ヲ招聘シテ裁縫ヲ担任セシメ以テ校運ノ進展ヲ計レリ」⁽¹²⁾とあり、教授陣の充実に腐心した様子が窺える。吉国・木村両女史はのち東京の実践女学校教師となる人たちである。

私立鶴嶺女学校が鹿兒島県知事によつて公認させられたのは明治三十年六月一日とされている。原文には「実ニ本県ニ於ケル女学校ノ嚆矢ト謂ツベキナリ此時ニ当リ市内及地方ニ於ケル好学心ニ燃エル良家ノ子女ハ多ク本校ニ集マリ来リ教職員モ亦熱誠職務ニ尽瘁セシヲ以テ教育ノ功果著シク上リ校運愈々進展スルニ至レリ」⁽¹³⁾とある。女学校の嚆矢であつたかどうかについては、先述のとおり、明治十年代以降の私塾簇生の動向を加味して考察しなければ結論は出せないが、修業年限や教科目等で鶴嶺女学校が急速に充実発展した事実には注目しなければなら

るまい。当時の校舎敷地等は次のようになっていた。すなわち、鹿児島市平ノ町一八三、土持肇氏宅を校地として、鶴嶺女学校創設時の校舎は日本式建物八畳二室・六畳二室・三畳二室・二畳一室であったが、明治三十二年に至り、九州沖繩八県連合共進会の閉会后不用建物一棟を払下げて増築し、さらに、鹿児島県農学校の鹿屋移転の際払下げてもらった校舎一棟で増築したのである。初年度の生徒数は、二学級の二六人で、修業年限は本科二ヶ年、裁縫科一ヶ年、共に高等小学校卒業以上の学力を入学資格としていた。教職員の構成は、教員が島津サエ子校長以下五人、顧問が町田、椎原、青木、黒川、上床の五氏と土持肇書記から成立していた。教科目は次の通りである。¹⁵⁾

本科Ⅱ修身・国語・作文・習字・英語・歴史・地理・数学・理科・図画・唱歌・家事・裁縫・刺繡・体操・生花・茶湯
裁縫専科Ⅱ修身・国語・作文・習字・家事・裁縫・刺繡・茶湯・唱歌・生花

授業時数が不明のため、どの教科に重点をおいて教育がなされていたか明らかでない。両科とも修身・国語関係と家事・裁縫関係を共通科目にしているが、本科ではこれらの他に英語・歴史・地理・数学・理科・図画・体操が組まれており計一七科目になる。特に、英語が教授せられていた点は当時全国的にみて注目に値することゝいえる。尤も、教育の主流はあくまで裁縫を中心とした実科的教科目であったと想像される。ちなみに、本科第二回卒業生の千早三津子はつぎのような思い出を寄稿している。¹⁶⁾

「……あの狭い教室で畳一枚敷に裁縫台一台を三人の生徒がすわらせられて朝から夕方まで一日中勉強したもので御座いました。……大きな帯に大きな風呂敷包みをかゝへ出校したもので御座います。よく父が申しました。

「お前達の格好は女中さんの宿さがしみた様だ」と笑はれたものです。それでも少しも恥しくもなく不平も言はず出校致して居りました。……」

そもそも、鶴嶺女学校創設の背景には、日清戦争後高まりつゝあつた国民教育への認識があつた。「教養ノ程度モ男女ヲ問ハズ其ノ標準自ツカラ高マリ来タレリ。コノ全国的潮勢ト本県ニ於ケル女子教育ノ實際トヲ彼此考慮シテ有識者間ニ本校創立ノ議ハ提唱セラレヌ。」¹⁷⁾と、「鶴嶺記念誌」は説明している。県民の期待がこめられていたといえよう。その際、町田実一らの献身的努力により一応軌道にのせることができた点を高く評価しなければならぬ。

二、鶴嶺女学校の展開

鹿兒島出身の樺山資紀文相が「高等女学校令」を制定した明治三十二年頃、鹿兒島県に公立女学校はまだ存在していなかつた。県立高等女学校が開校された明治三十五年四月、県では鶴嶺女学校に年額六百円の補助金を下附することを決めている。「同年度ヨリ明治三十八年マデ継続シテ」¹⁸⁾補助金の交付を受けたようだが、これは、鶴嶺女学校が県教育界に貢献してきた所甚大であることを認められたからである。県立高等女学校は、修業年限四ヶ年、定員四百名という規模で鹿兒島市加治屋町（東郷平八郎生誕地跡）に誕生したが、初年度の競争率は三倍だったというから合格できなかった者に教育の門戸を開くためにもレベルの高い女子教育機関が他にも必要だったのである。ちなみに、県立第二高等女学校の設立は明治四十三年である。

この頃、鶴嶺女学校の生徒たちは、どのような教育を受けていたのであろうか。回想記のいくつかを紹介しながら考察を加えてみよう。

「千石馬場通りに面して校名入りの門柱をくゞればお国振りの平家建、此が職員室事務室炊事室。その家の前庭

の位置に鍵なりにバラックの四教室、歩くと床が鳴る。『乙女の姿暫し止めむ』と歌留多競技が垣一重越の、中村病院病室から洩れて来て、授業中も春持つ浮れ心にされ勝ちであった。あの時代の母校は人家三軒位合せた寺小屋式であったが、外觀など問題でなく、通学生となった歓喜にはち切れそうな努力で中等教員検定受験を目ざして、私は精進したのであった。……自宅から一時間を要するのを四十分で歩き、二十分を予習に当てた。級の係の仕事を終へて帰る頃舎生達は早や勉強の様子であるが、帰宅しても寡婦となった母が夜に到るも裁縫して生活の糧にしている当時なので弟三人の炊事は私を待つて始められる。九時半頃机に凭る。それも電灯料を節約して豆ランプの下で復習に夜を更かした。……」¹⁹⁾

一本科第十三回（明治四十三年）卒業生の福崎里羊子はこのように述べている。また、同十二回生の本村テイの寄稿文にはつぎのようなくだりがある。

「……屋根低の薄暗い教室に入りに困る位にガタ机を並べて教授を受けるもので御座いました。それでも県立女学校は四年間に修業なさる科目を二年間で負けぬ気で修業いたしたもので御座います。殊にお裁縫や手芸などは我学校の得意とする所で立派な手並の方々が多う御座いました。之は偏に家庭婦道を目標として教育につとめられた賜物で御座いませう。……小松文雄先生は創立当初より図画習字の教育にお努め下さいました方で其成績は顕著なるものが御座いました。いつぞや先生の御思出話にも……町田実一先生が全国女学校の短冊をお集めになりました比較せられました処、我鶴嶺女学校の一つ番優秀であったといふような事も御座います。このやうな事で私立学校として我鶴嶺女学校は全国に聞えていました。……」⁽²⁰⁾

参考までに明治四十年代の女学生の服装をみると、筒袖に海老茶袴を長目に着ながしたもので、鶴嶺女学校も県立女学校も同様だったという。創立当時、良家の令嬢たちが桃割の髪形に長袖にお太鼓の服装で登校していた頃か

ら十年の歳月を経て、少しずつ女学生の風俗にも変化が見られていた。

さて、この頃の鶴嶺女学校の経営はどうであったのか。「沿革史」によれば、「明治四十年四月新穂義邦氏校長トナル、当時校勢振ハズ経営亦困難ニ陥リシ為メ有志者奔走尽力シ漸ク之ヲ維持セリ」とある。これより先、明治三十五年四月三日からは、校長島津サエ子に代つて上床惟為が事務を執つていたが、翌年四月、上床病いの故に職を辞したため島津サエ子が再び事務を執つていたのである。明治二十九年創設以来約十年島津サエ子が校長職にある間には、中央から川村純義伯爵（海軍元帥）・高木兼寛男爵（軍医総監）・長崎省吾（宮内省調度局長）の視察を受けたり、樺山資紀伯爵が夫人同伴で卒業式に臨席したりといったことに表現されるような慶事も多く、よいスタートを切ることができたのだが経営の方は決して順調にゆかなかつたようである。原文は続く。「小松文雄氏藤武新兵衛氏等ノ如キハ維持資金ヲ造成センガ為メニ画会ヲ催シ七百余円ヲ得テ以テ寄贈セラレタリ……」⁽²²⁾しかしながら、新校長の計画は意の如くならず、在職期間わずか九ヶ月にして新穂義邦は校長の座をおりることゝなつた。彼はのちに熊本県の玉名女子職業学校に転じている。

後任人事は萩原英子を中心に進められた。そして、男爵島津長丸夫人治子に白羽の矢が当たる。時に明治四十年十二月であつた。島津治子女史校主校長となるや、同月、顧問に島津サエ子・萩原英子、商議員に岩崎行親・町田実一・泥谷良次郎・佐々木寛・有川貞寿・愛甲兼達・黒川澄江・渋谷寛・小松実・宮里正静・折田兼至・元吉秀三郎といった人々を嘱託した上で、鋭意校紀の刷新にのり出した。ちなみに、校長島津治子は鹿兒島中学造士館長島津珍彦の娘で、のち東宮女官長に抜きされた人である。後述のように建国の精神にもとづき薩摩古来の美風を尊重して「内剛外柔」の婦徳を養おうというわけで、良妻賢母型の女子教育を推進した。やがて、士族出身の花嫁学校として東京でも話題にのぼるようになるこの学校は、第三代校長島津治子の就任を期して一大改革を実施する

のである。

すなわち、「泥谷良次郎小松実の両氏ハ学則及ビ章程ヲ起草シ岩崎行親氏ハ校地選定ノ衝ニ当リ愛甲兼達氏ハ寄附金ノ件ニツキ公爵島津家ト交渉ノ任ニ当リ各其斡旋ノ勞ヲ取レリ。」⁽²⁴⁾と記録されているように、島津家を背景に、県教育界の第一人者を動かして、新天地に道を開こうとする意気込みであった。市内清水町一三八番地に新築移転を行なうにあたって、公爵島津忠重から六、五〇〇円、侯爵松方正義から三〇〇円、有志・校友会から一、二〇〇円にのぼる多額の寄付を受けている事実一つをとり出してみても、改革の性格や意義が想像できる。以下、教育の内容を考察してみたい。

鶴嶺女学校の教育綱領が制定されたのは、明治四十二年三月であった。曰く「我国建国ノ精神ニ基キ薩摩古来ノ美風ヲ尊重シテ内剛外柔ノ婦徳ヲ養ヒ以テ現代ニ処セシム」。⁽²⁵⁾この婦徳を如何にして「現代」に生かしてきたのか、先ずは同校の学則を追いながら考察の歩を進めたい。

同年二月改正された学則によれば、修業年限・入学程度・教科目等はつぎのようになっている。⁽²⁶⁾

本科（二箇年・尋常小学校六年卒業以上ノ学力アル者）|| 修身・国語・算術・地理・歴史・理科・家事・裁縫・図画・唱歌・割烹・体操（但志望ニヨリ英語插花点茶ヲ授ク）
 技芸科（一箇年・高等小学校卒業以上ノ学力アル者）|| 修身・国語・図画・家事・裁縫・編物・刺繡・割烹・園芸・音楽（但志望ニヨリ插花点茶ヲ授ク）
 補習科（一箇年・本科及ビ技芸科卒業生又ハ之ト同等以上ノ学力アル者）|| 修身・国語・家事・裁縫・編物・刺繡・算術・插花・歴史・理科・英語・図画・点茶・音楽・体操（但修身教育国語家事裁縫編物刺繡ノ外ハ一科又ハ数科ヲ選修スルコトヲ得）

従来、同校の入学資格は高等小学校卒業以上の学力ある者となっていたのであるが、義務教育年限延長により、明治四十年以降尋常小学校が六年制になったことから、かゝる改正が行われたと推察できる。

さらに、翌四十三年三月、学則を改正して²⁷⁾技芸科を二つに分け、尋常小学校六箇年卒業以上の学力ある者を入学程度とする修業年限二箇年の「技芸科一部」と、高等小学校卒業以上の者を入れる修業年限一箇年の「技芸科二部」としたほか、新たに、「裁縫研究科」を置いている。

裁縫研究科（六箇月以上・本校本科卒業以上ノ学力アル者） || 修身・裁縫・袋物

このように、島津治子新校長就任によって鶴嶺女学校は施設・内容とも画期的成果をあげることとなる。こゝで予算面に注目してみると、つぎの如くである。²⁸⁾

- 明治四十一年度 四、二三一円七七一
- 明治四十二年度 四、一〇一円七七一
- 明治四十三年度 五、〇三三円（内、八〇〇円は鹿児島県からの補助金）
- 明治四十四年度 五、八一五円一五〇（内、八〇〇円は県費補助金）
- 明治四十五年度 七、四七三円（内、六〇〇円は県費補助金）
- 大正二年度 七、二六二円（内、一、〇〇〇円は県費補助金）
- 大正三年度 六、八六二円（内、一、〇〇〇円は県費補助金）

以下略

鹿児島県からの補助金が予算の約一五パーセントを占めるといふ経営が行われていたわけである。そのほかに、大口の寄附がなされたことは、先述の新築移転の実例に示したとおりである。

新築移転は明治四十二年三月であったが、新しい施設の規模はつぎのようになっている。⁽²⁹⁾

○校舎二階建新築 建坪六三坪

○旧校舎移転 建坪(一棟)

○校舎ヲ移シ寄宿舎ニ改造 建坪六八坪

その後、明治四十四年五月には事務室および教室の増築を起工しており、大正三年三月の「現況」⁽³⁰⁾によれば、校舎四八八坪に生徒総数三九五名となっている。増改築は続き、大正七年には二階建寄宿舎、同十一年には六教室を有する二階建校舎、翌十二年には寄宿舎改築(三七七坪)がある。この段階で施設の完成をみたようである。ちなみに、校地面積は、一、九〇七・〇六坪(内借地八一坪)であり、昭和十二年の記録によれば、普通教室一二、特別教室七、其他一〇として用いられていた。校舎延坪数は七〇六坪である。

福崎里羊子「在学当時の追憶」には、「……(卒業)式場は奉安庫背後の校舎の二階、左側一段底地に技芸科教室兼寄宿舎の平家建があった。閑静清浄な環境の新校舎での初の卒業式に在学生総代で祝辞を述べた私の思出は、懐かしい生活の印象として微笑されるのである。……」⁽³²⁾と述べられている。

新校舎に移転し、名実共に発展した鶴嶺女学校には、中央からの大物政治家たちの来訪が絶えなかつた。明治末期に限って主な出来事を摘記してみよう。⁽³³⁾

○明治四十二年三月二十八日 侯爵松方正義氏(視察)

○同年五月 逓信大臣後藤新平氏(視察)

○同年十一月九日 文部大臣小松原英太郎氏（視察）

○同年十二月十八日 伯爵樺山資紀氏夫人同伴（視察・生徒二訓話）

○明治四十三年五月十八日 内務省地方局長床次竹二郎氏本県内務部長関屋貞三郎氏随行（視察・訓話）

○同年九月二十九日 海軍少将伊地知彦次郎氏本県視学日高彦市氏随行（参観・訓話）

○明治四十四年五月十二日 農商務大臣子爵大浦兼武、農務局長下岡忠治、農商務大臣秘書官堀貞、国民新聞記者

中島氣崢、大和新聞記者山本昇、本県内務部長沢田牛麿、同学務課長豊田勝蔵ノ諸氏（視察）

○同年六月二十九日 元帥海軍大将子爵井上良馨、陸軍大将子爵大迫尚敏ノ両氏（視察・訓話）

以下略

中央から、政治家や軍人が視察のため来訪し、時には一場の訓話がなされる、こうした雰囲気に加えて、鶴嶺女学校のために尽力した要人への祝意贈呈の機会もあつた。一例として、「明治四十三年十二月二十四日 侯爵松方正義氏ノ金婚式ニ当リ生徒合作ノ絹糸製編物卓子掛ヲ贈呈シ以テ祝意ヲ表シタリ」⁽³⁴⁾があげられる。当時技芸科二部に在学中の川辺ナヲや野元サトの談話によれば、上記記念品の製作にあたっては、生徒が各自、一五センチ四方ほどの白いレース糸の作品を持ち寄り、裁縫教諭の松崎ナヲらの手ほどきを受けて共同製作をしたのだという。翌年三月十八日には、公爵島津忠重氏婚儀に際し、長さ四尺夫婦松の刺繡額と花瓶敷の二点を贈呈しているが、これも同義であろう。島津治子校長の父親である貴族院議員男爵島津珍彦氏葬儀には職員生徒一同会葬し榊一对を贈進している。

こうした諸例によつて推察できるように、鶴嶺女学校は、鹿兒島の女子学習院（華族女学校）的性格を付与され

二見：鶴嶺女学校について

表1 鶴嶺女学校の卒業生数（その1）

(人)

卒業回数（年月）	本 科	裁縫専科	計	
① 明治 31.3	20	46	66	(70)
② 32.3	29	30	59	(60)
③ 33.3	57	50	107	(112)
④ 34.3	49	40	89	(92)
⑤ 35.3	110	28	138	(122)
⑥ 36.3	91	29	120	(151)
⑦ 37.3	90	44	134	(119)
⑧ 38.3	73	27	100	(95)
⑨ 39.3	89	37	126	(131)
⑩ 40.3	79	38	117	(134)
⑪ 41.3	96	50	146	(145)
⑫ 42.3	120	52	172	(185)
⑬ 43.3	112	85	197	(193)
小 計	1,015	556	1,571	(1,587)

出典：同校「学校沿革史」pp. 6～16

※ 原文では、⑥回生と⑩回生の総教がそれぞれ114と116になっていたが、120と117に訂正して小計を出した。

※※ () は「四十周年記念誌」p.59 に記されている数値。

表2 鶴嶺女学校の卒業生数（その2）

(人)

卒業回数（年月）	本科	技 芸 科		研究科	補習科	高専	計
		一部	二部				
⑭ 明治 44.3	115		62		9		186
⑮ 45.3	92		92	2	5		191
⑯ 大正 2.3	58		99	4			161
⑰ 3.3			92	11			103
⑱ 4.3		56	28	9			93
⑲ 5.3		61	32	7		11	111
⑳ 6.3		29	50	6		4	89
㉑ 7.3		54	60	9		1	124
㉒ 8.3		46	61	18		19	144
㉓ 9.3		59	94	16		5	174
㉔ 10.3		58	96	32			186
㉕ 11.3		97	97	36			250
㉖ 12.3		124	117				241
㉗ 13.3		91	122	91			304
㉘ 14.3		51	99	59			209

出典 同校「学校沿革史」pp. 19～51

つゝ発展していった。しかし、同時に、県立高等女学校と並び称せられる女子中等教育機関として、教育内容の充実に万全を期しているのである。こゝで明治・大正期における鶴嶺女学校の卒業者数(表1・表2)を掲載しておく。

三、鶴嶺高等女学校の成立

鶴嶺女学校に実科高等女学校が併置されたのは明治四十五年三月であつた。清水町に移転改築して三年目、「規模ノ廣大輪奐ノ壯麗全ク其ノ面目ヲ一新」した鶴嶺女学校には、「校運頓ニ勃興シ島津校長ノ学徳ヲ欣慕シテ入学ヲ志望スルモノ翕然トシテ遠近並ビ至リ……」と称讚される程に新しい雰囲気醸成されていた。補習科や裁縫研究科の充実に加えて、高等女学校令改正(明治四十三年)に伴う、実科高等女学校の法制化がその契機となつたようである。残念ながら修業年限三箇年程度の新課程がどんな教科目によつて構成されていたのか、鶴嶺女学校側の記録には見出せないようであるが、この点を補うために、こゝで実科高等女学校の制度について一般的な考察を加えておきたい。

高等女学校の生みの親とされる樺山資紀文相が郷土の女学校「鶴嶺」に特別の関心を抱いていたであろうことは既述のとおりである。樺山の女子教育観をこゝで見よう。「健全ナル中等社会ハ独リ男子ノ教育ヲ以テ養成スヘキモノニアラス。賢母良妻ト相俟チテ善ク其家ヲ斉ヘ始テ以テ社会ノ福利ヲ増進スルコトヲ得ヘシ」という指摘は、明治三十二年高等女学校の設置目的に関して述べたところである。これにより、高等女学校は、国民教育における社会的分業と、女性固有の教育つまり良妻賢母主義の二面性が成立当初から規定づけられたといわれている。樺山以後文部省のてこ入れもあつて、公立女学校は良妻賢母主義に基づく高等女学校一色にぬりつぶされるわけだが、

私立の場合も、キリスト教主義女学校の一部を除いて、公教育体制の中へ次第に組込まれていった。さらに注目すべきことは高等女学校の二分化現象である。すなわち、文部省は、明治四十一年五月、高等女学校令施行規則を改正し、学校差、地域差に応じて時間配当の自主裁量を認める方針を打出したのである。「実務的良妻賢母の養成」をめぐす地方型の中堅主婦の育成が、従来高等女学校の主流を占めた都市型の上流主婦の育成と並んで要請されるようになった。かくして、実科高等女学校が「主トシテ家政ニ関スル学科ヲ修メントスル者」を対象として設置されるようになったわけだが、その実際は「勤勞ヲ厭ハサル美風ヲ失ハサラシメ質素勤勉ノ氣風ヲ養成セシメ」ること⁽³⁸⁾を目的に、全時間の約半分を家事、裁縫科に充て、その上に修身や国語などを通じて家族国家観を体得させるといふ形になっていた。

このようにみえてくると、鶴嶺女学校は、創設当初から実科高等女学校的性格をもっていたことになり、大正期前半は、かゝる時勢をそのまま映し出しているようである。大正二年の記録によれば、⁽³⁹⁾「六月六日 前田正名氏本校ヲ視察シ一場ノ訓話ヲ与ヘラレタリ」八月 東京実践女学校長下田歌子女史ヲ聘シ本県女子師範学校々舎ヲ借り家政学ニ関スル夏季講習会ヲ開キタリ」十二月十六日 前外務大臣内田康哉氏本校ヲ視察シ生徒ニ対シ一場ノ訓話ヲ与ヘル」とある。下田歌子の家政学がどのような内容であつたかわせて注目したい。

大正三年三月には、実科の第一回生七六名が第十七回鶴嶺卒業生技芸科九二名研究科一一名と共に卒業した。翌大正四年三月には、県知事の認可を受け、鶴嶺女学校に高等専攻科を新設して実科高等女学校卒業以上の者の学習の便宜を開くと共に補習科を廃止している。記録によれば、⁽⁴⁰⁾爾来毎年度末「現況」の中で生徒の内訳は実科ノ部、鶴嶺ノ部と二分してその人数が示されているが、さらに卒業生の項を見ると、両者の回数を別々にしている点は上記のとおりである。なお、第十七回鶴嶺卒業生以降は本科が姿を消している。⁽⁴¹⁾

大正期前半は、このように鶴嶺女学校の本科に代わった形で併設の実科高等女学校が次第に充実していく時期であったが、その他注目すべき点を列挙すれば、つぎのようである。⁽⁴²⁾

○大正三年十二月十四日 校友会雑誌『ひなつる』第一号ヲ発行ス

○大正四年十一月三日 校歌ヲ制定ス

○大正五年一月十九日 天皇陛下御真影ヲ拝戴ス

○同年十月二十四日 皇后陛下ノ御真影ヲ拝戴ス

○大正六年十一月十二日 朝鮮留学生洪島子本校へ入学セリ

○大正七年四月 生徒ノ制服ヲ定ム

と、続いている。そして、大正八年九月十九日には、正式の学校名が「鶴嶺女学校及び鶴嶺実科高等女学校」となった。私立の二字が省かれている。

さて、鶴嶺実科高等女学校の呼称はわずか半年で消えることになる。すなわち、翌大正九年三月十三日、鶴嶺実科高等女学校の組織を変更して、鶴嶺高等女学校と称することになったからである。修業年限四箇年の本科に同一箇年の実科を併置し、従来の高等専攻科は之を廃止することにした。教科組織は高等女学校令に専ら準拠していくことになる。

思うに、鶴嶺は、家政科の内容を主流としながらも、常に上流主婦の育成を目的とする地方女学校であった。薩摩古来の婦徳を「現代」に処せしむという教育綱領を生かして、常に前進していくところが感ぜられる。大正期後半は鶴嶺が名実共に本領を発揮した時期だといえよう。その状況をいくつかの角度から辿ってみる。

はじめに、予算規模の変遷をみてみたい。⁽⁴³⁾

- 大正六年度 県費補助金一、〇〇〇円を合して六、五八九円九三〇
- 大正七年度 県費一、〇〇〇円を合して八、一二七円八六〇
- 大正八年度 県費一、五〇〇円を合して一二、七一八円〇三〇
- 大正九年度 県費二、五〇〇円を合して二八、五五二円八六
- 大正十年度 県費三、〇〇〇円を合して四一、一五五円一八〇
- 大正十一年度 県費三、〇〇〇円を合して四五、四八二円五五〇
- 大正十二年度 県費三、〇〇〇円を合し（以下不明）
- 大正十三年度 県費三、〇〇〇円を合して四九、七八二円五八銭

以下略

県費による補助金が三倍に増額していることもさることながら、八年間に総予算額が約七倍に増えていることは注目に値する。

発展の様子を示しているもう一つの点は校舎規模である。大正五年三月の四八八坪が大正十一年には九三八坪、翌十二年には、一、二五〇坪となっており、この時期の施設拡充の様子を伝えている。

続いて、教員数・生徒数の変化に注目してみよう。⁽⁴⁾大正六年三月段階では教員一八名に対して生徒三三四名（内訳 実科ノ部一六九・鶴嶺ノ部一六五）であったのが、大正九年には、二五名対五二〇名（内訳 高女ノ部二五一・鶴嶺ノ部二六九）となり、大正十一年には、三一名対八二一名（内訳 高女本科二九一・同実科二七三・鶴嶺ノ部二五七）、大正十三年には、四二名対一、一三三名（内訳 高女本科四二四・同実科三五二・鶴嶺ノ部三六五）とそれぞれ二〜三倍に増えている。

昭和十一年度 學校日誌抄

- 四月 四日 始業式
- 全 五日 入學考査及身体検査、午後四時合
格者發表
- 全 六日 入學式 江島教諭新任式
- 全 十二日 軍旗祭に上級生參列
- 全 十四日 照國神社に於て勸學祭執行、後吉
野無電局へ新入生歡迎遠足
- 全 十六日 身体検査(舊在校生)
- 全 十七日 故島津長丸男爵墓參
- 全 二十一日 生徒役員任命
- 全 二十九日 天長節拜賀式
- 全 三十日 有馬教諭告別式
- 五月 三日 九州一周旅行團出發(引卒者森
川、野島教諭)
- 全 七日 熊本方面旅行出發(引卒者羽田、
朝倉教諭)
- 全 八日 一、二年其他殘留組吾平山陵參拜
九州一周旅行團無事歸着
- 全 九日 熊本方面旅行團無事歸着、山口教
諭告別式
- 全 十三日 旅行報告會
- 全 十六日 兒玉教諭新任式、父兄後援會總會

- 全 十九日 良子女王殿下御台臨記念日
- 全 二十日 校長先生全國高等女學校長會議
へ出席の爲上京
- 全 二十五日 薩摩義士記念日につき職員生徒
參拜
- 全 二十七日 海軍記念日、校長先生の講話あ
り。
- 全 二十九日 中間考査施行(向ふ五日間)
- 全 三十日 故東郷元帥二周年、墓參をなす。
- 六月 一日 本校創立記念日、神撰田播種
- 全 四日 ムシ齒豫防デーにつき校長訓話
- 全 八日 時の記念週間、各自生活表記入
軍事講演(講師常盤艦長)
- 全 十八日 專攻科生常磐艦に於ける海軍点
呼見學、衛生講話(講師有馬講士)
- 全 二十五日 敬愛園女醫前田女史の「敬愛園事
情について」の講演あり
- 全 二十九日 學期末考査開始(七月三日迄)
- 七月 三日 九州齒科醫專講演部の口腔衛生
に關する講演あり
- 全 四日 南座に於ける軍事映畫見學
- 全 六日 水泳の爲めの身体検査を行ふ
- 全 八日 本日より水泳實施の苦なりしも
雨天のため中止
- 全 九日 水泳開始
- 全 十三日 本日より鶴嶺神社境内に於ける

二見：鶴嶺女学校について

全 十五日	林間授業開始	十月 六日	學級自治會
全 十六日	水泳練習及林間授業終了 故長丸男爵墓參	全 九日	(生徒役員會、朝倉教諭告別式)
全 十七日	終業式、本縣女子中等學校陸上競 技大會選手推戴式	全 十二日	石原教諭新任式
全 十八日	興正寺に於て市内居住生徒の教 護會開催、本日より二十五日迄補 習科生其他軍需品製作をなす。	全 十四日	石神教諭告別式、西教諭新任式
全 二十五日	本縣女子中等學校陸上競技大會 バスケット部に参加し少年部優 勝	全 十六日	秋季遠足を行ふ、上級生は櫻島登 山其他は千貫平
九月 三日	第二學期始業式	全 二十二日	展覽會製作品目錄作製
全 十一日	防護マーク全生徒着用	全 二十三日	縣招魂祭參列(本四、實二)
全 十二日	明十三日(日曜)乃木將軍夫妻記 念日につき校長の講話あり。	全 二十八日	照國公記念日及妙圓寺詣りにつ き講話あり。
全 十四日	本校防護團組織さる	全 三十日	教育勅語下賜記念日につき講話 本日より冬服着用
全 十六日	今日日縣下一切防空演習行はる。 本日より乃木靜子夫人誕生地掃 除番に當り四イ學級より始む。	十一月三日	明治節拜賀式、体育デー
全 十八日	四十五聊隊の新兵機實戰射撃を 鴨池海岸にて見學	全 九日	本日より勸學週間
全 二十四日	江島教諭告別式	全 十日	國民精神作興詔書下賜記念日に つき講話、後講師岡積先生の國体 詩講義及吟詠あり。
全 二十五日	南洲翁記念日につき代表學級參 拜 官修墓地祭典にも參列す。	全 十一日	侍從御差遣記念日、小學藝會を催 す。
全 二十六日	渡部教諭新任式	全 十七日	御親閱拜受記念日(昭和十年)本 日よりバザーの食券を賣捌く。
	市内小學校長等授業參觀さる	全 二十四日	講師岡積先生御指導の下に國体 詩吟詠
		全 二十六日	昭和六年御親閱拜受記念日につ き伊敷に於ける記念式に參列
		全 二十七日	展覽會並バザー會場準備

創立二十五年の記念式典が行われたのは大正十一年十一月であった。同月十七日には、鹿兒島新聞社主催による県下中等学校女生徒オリンピック大会が初めて開かれたが、鶴嶺もこれに参加し、リレー・レースに優勝している。

大正十二年、久邇宮ら来鹿の折、鶴嶺高等女学校も訪問されたが、その時の状況を原文にて再現しておく。⁽⁴⁵⁾

「(五月)十九日 久邇宮妃殿下ニハ良子女王信子女王両殿下ヲ伴ハセラレ午後三時本校へ御台臨アラセラル 一千有余名ノ生徒ハ本校門前南側ニ整列奉迎シ鶴嶺幼稚園ノ児童ハ校庭ニ於テ奉迎シタリ 三殿下ニハ島津校長ノ先導ニヨリ予テ準備ノ御室ニ成ラセラル三殿下ニハ暫時御休憩ノ後校長ノ先導ニテ教室ニ成ラセラレ川上論逸ノ本科二年英語教授及ビ園児ノ遊技ヲ御覧遊ハサレ三殿下興ニ入ラセラレ屢微笑ヲ湛へ御物語アラセ給ヒ予定ノ十五分間ハ既ニ経過シ二十五分ヲ経テ県立第二高等女学校ニ向ハセラル」

これは、鶴嶺が皇室と深いかかわりをもっていたことを示す一例である。同年十月二十七日、島津校長が東宮女官長に選ばれたため、男爵島津長丸が新校長に就任したこと、翌年二月十一日、良子女王陛下御台臨記念碑除幕式を挙行したこと、同月十六日には島津校長が東京で拝受した良子女王陛下御詠の拝戴式を挙げていること、十月二十三日、東宮殿下御影の拝戴式を講堂で開いたこと、などのほか、前校長島津治子の講演会や皇室関係者の来訪などが相続いでいる。

大正十二年に就任した教諭山元スギは回想録の中でつぎのように述べている。⁽⁴⁶⁾

「……当時校長先生は島津治子先生、副校長宮里、勝目両先生のもとに多数の生徒は常に校長先生の徳風を慕ひ、その熱誠に景仰して居りました。同年(大正十二年)十月、本校のためには洵に惜いことながら校長先生は東宮女官長に任ぜられ、畏くも未来の 国母 陛下の御側近の人となられました。先生を失ふことは残念ながら、先生の御光栄は全国女学校を通じて比類ない本校の光栄とも存じ、悦んで御送り申し上げました。幸ひに、御夫君

島津長丸男爵を校長先生と仰ぐ事になりましたのは、重ね重ねの本校の名誉であり悦びで御座りました。先生は、その由緒ある御家柄の為か、洵に温厚慈父の如き玲瓏な御人格でした。」

「昭和二年二月一日に島津長丸先生は東都に葬去せられ、同時に再び島津治子先生を校長先生としてお迎へ致すことになりました。然るに治子先生は既に東都の教育、社交界に枢要の地位を占め、加ふるに女官長の大任をも経て来られた事故、東京を御離れ難い御事情にて、同四年には伊集院直記先生が校長先生になられ、治子先生は名誉校長として遠く東都より、その御徳風を九州の南端にまで及ぼさるゝ事となりました。厳正謹直な伊集院先生のもとに、学校はますます平和順調な発展を致しました。特に昭和六年四月より特設された家庭科は、其の頃本県女学校中の特異な施設だったので。この年以來、立派な花嫁さんは数多く世に出て、何時とはなしに、花嫁学校と言はるゝ様になりました。唯今では温情な松崎なを子先生の老練な御指導に依つて、日本婦人の伝統的な婦徳は余すところなく授けられて、ますます世に家庭科独特の意義を示して居ります。……」

長文に亘つたが、この中に、当時鶴嶺の置かれていた状況が如実に示されている。家庭科は、昭和九年四月、家庭寮と改称された。同年十月には同趣旨の教養を授けるために「実務科」も特設されている。

昭和期の鶴嶺は、女学校から高等女学校へ流れが移っていた。しかし、実科（家政科）的教育内容を創立以來の伝統としている学校だけに、高等女学校本科生の他に、同実科や鶴嶺女学校裁縫科（元技芸科）に入学する生徒も多く他の高等女学校には見られない独特な雰囲気漂っていた。生徒たちがどのような日常生活を送っていたか、昭和十一年を事例として考察してみよう。⁽⁴⁷⁾

全二十八日	展覧會並バザー陳列及諸準備	二月 一日	海事變記念講話 故長丸男爵十年祭(降雨のため代表學級参列)
全二十九日	四十周年記念展覧會並バザー	全 四日	黒木教諭告别式
全 三十日	昨日の後始末	全 五日	學級自治會
十二月五日	公會堂に於ける市主催慈善音樂會を希望者は聴く。	全 六日	生徒役員會
全 九日	卒業學年縣會見學	全 十日	公會堂に於て北島氏の力技觀覽
全 十一日	卒業學年盲啞學校、工業試驗場、薩摩製絲會社見學	全 十一日	紀元節拜賀式
全 十四日	學期末考查開始	全 十六日	公會堂に於て映画「軍國の母」を見る。
全 十六日	卒業學年裁判所見學	全 十七日	伊敷練兵場に於ける第一艦隊觀兵式見學
全 二十三日	故長丸男爵墓參	全 十八日	軍事講演(講師假屋少佐) 上級生は午後一時より軍艦長門見學
全 二十四日	終業式	全 二十六日	今明日四十周年記念式場其他諸準備をなす。
一月 一日	四方拜賀式	全 二十八日	創立四十周年記念式舉行
全 八日	第三學期始業式、伊敷練兵場に於る陸軍始觀兵式見學	三月 三日	八日まで學年考查
全 十二日	櫻島爆發記念日、爆發當日の情況講話及非常時避難演習を行ふ。	全 六日	地久節拜賀式
全 十五日	學級自治會	全 十三日	校外遠足及送別會
全 十六日	生徒役員會	全 十六日	謝恩會
全 十八日	本日より十日間の寒中修養開始	全 十八日	卒業式
全 二十一日	學校後援會役員會	全 二十日	修業式
全 二十二日	希望者は公會堂にてマーガレットユキのダンスと音樂を觀覽		
全 二十六日	赤穂義士記念日、輪読會と浪曲大會(講師志道軒大會)		
全 二十八日	寒中修養終了、精勸證授興式 上		

むすび

昭和十五年、鶴嶺高等女学校は鹿児島市に移管された。昭和十年前後、全国的に女子の入学者が激減したこともあって、「存続廃止ハ鹿児島市ノ任意タルモノトス。但シ鶴嶺高等女学校ノ名称ハ鹿児島市ニ於テ、之ヲ継承スルモノトス」⁽⁴⁸⁾といった付帯条件がついていた。こゝに、さしもの繁栄を続けてきた鶴嶺も私立学校としての使命を終えたのである。

第二次大戦後、鹿児島市立高等女学校に吸収され、現在、玉龍高等学校の源流の一つとなっている。昭和四十九年十月五日、母校跡に「校跡碑」が建立されたが、鹿児島県女子教育の先駆として貢献した鶴嶺の役割は、今や歴史的検証を要請されているといえよう。

最後に、鶴嶺女学校、同高等女学校の創立以来の統計を示しておきたい。昭和十二年の創立四十周年の折にまとめられた記念誌に掲載された資料にもとづくので、それ以後の統計整理は今後の課題であることをこの際お断りしておきたい（表3・表4）。

第二次世界大戦後の学制改革で高等女学校は廃止された。鶴嶺女学校・同高等女学校もいずれは新しい制度にそって再編成を余儀なくされたであろう。既述のとおり、鶴嶺は、現在、鹿児島市立の玉龍高等学校の前身校の一つとして位置づけられ、その命脈をわずかに保持している。四十九年間に六、三三九名の卒業生を世に出したといわれるが、「ココニ古キ歴史ト伝統ヲ誇ル同校ノ旧校舍跡地内ニ『明治二十九年創立鶴嶺高等女学校跡』ノ文字ヲ碑ニ刻シ、以ツテ同校ノ校名ヲ後世ニトドメ置クコトニナツタ」⁽⁵⁰⁾と記されているに過ぎない。

幸い、鹿児島玉龍高等学校には鶴嶺関係の資料が保存されている。それらを繙きながら、機を見て再度、鶴嶺女

表3 鶴嶺女学校・同高等女学校の卒業者数

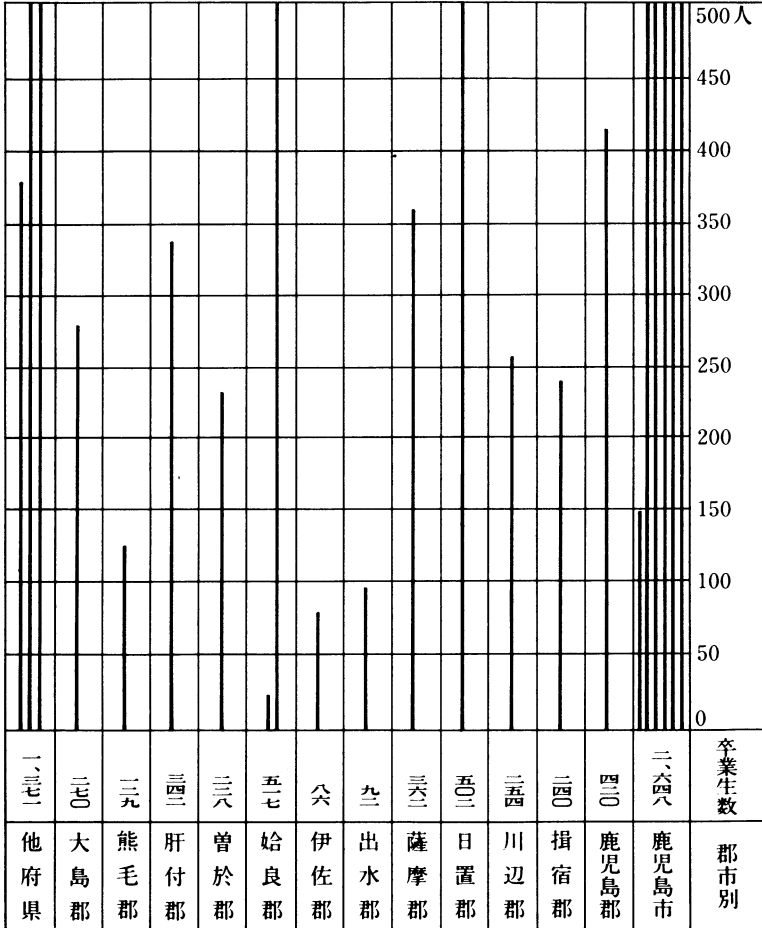
(人)

卒回 業数	卒年 業度	本 科	鶴 嶺 女 学 校				鶴嶺高等女学校			特 設 科		計	累 計	
			裁 縫科	専 修科	高 等科	研 究科	元一 裁縫科部	元二 裁縫科部	本 科	実 科	補 習科			家 庭科
①	明治31	24	46	—	—	—	—	—	—	—	—	70	70	
②	全 32	29	31	—	—	—	—	—	—	—	—	60	130	
③	全 33	61	51	—	—	—	—	—	—	—	—	112	242	
④	全 34	50	42	—	—	—	—	—	—	—	—	92	334	
⑤	全 35	94	28	—	—	—	—	—	—	—	—	122	456	
⑥	全 36	102	29	—	—	—	—	—	—	—	—	131	587	
⑦	全 37	93	26	—	—	—	—	—	—	—	—	119	706	
⑧	全 38	66	27	—	—	—	—	—	—	—	—	93	799	
⑨	全 39	94	37	—	—	—	—	—	—	—	—	131	930	
⑩	全 40	82	52	—	—	—	—	—	—	—	—	134	1,064	
⑪	全 41	97	48	—	—	—	—	—	—	—	—	145	1,209	
⑫	全 42	124	61	—	—	—	—	—	—	—	—	185	1,394	
⑬	全 43	101	85	7	—	—	—	—	—	—	—	193	1,587	
⑭	全 44	114	—	10	—	20	46	—	—	—	—	190	1,777	
⑮	全 45	91	—	5	53	45	53	—	—	—	—	247	2,024	
⑯	大正 2	57	—	—	3	56	46	—	—	—	—	162	2,186	
⑰	全 3	55	—	—	11	55	39	—	75	—	—	235	2,421	
⑱	全 4	—	—	—	9	62	27	—	83	—	—	181	2,602	
⑲	全 5	—	—	11	7	62	31	—	65	—	—	176	2,778	
⑳	全 6	—	—	4	6	30	50	—	68	—	—	158	2,936	
㉑	全 7	—	—	1	7	57	69	—	69	—	—	203	3,139	
㉒	全 8	—	—	19	17	51	70	—	65	—	—	222	3,361	
㉓	全 9	—	—	5	14	64	93	—	66	—	—	242	3,603	
㉔	全 10	—	—	—	28	67	96	—	114	—	—	305	3,908	
㉕	全 11	—	—	—	35	97	96	—	114	—	—	342	4,250	
㉖	全 12	—	—	—	90	124	120	45	136	—	—	515	4,765	
㉗	全 13	—	—	—	—	99	122	89	165	—	—	475	5,240	
㉘	全 14	—	—	—	24	52	99	87	179	35	—	476	5,716	
㉙	全 15	—	—	—	8	55	47	85	173	33	—	401	6,117	
㉚	昭和 2	—	—	—	8	27	47	120	83	31	—	316	6,433	
㉛	全 3	—	—	—	3	29	73	143	51	18	—	317	6,750	
㉜	全 4	—	—	—	2	31	52	105	41	9	—	240	6,990	
㉝	全 5	—	—	—	2	26	27	79	55	8	—	197	7,187	
㉞	全 6	—	—	—	3	18	42	83	41	13	—	200	7,387	
㉟	全 7	—	—	—	4	13	24	83	40	15	—	179	7,566	
㊱	全 8	—	—	—	6	10	17	72	27	15	(21)	—	147	7,713
㊲	全 9	—	—	—	5	17	26	60	39	22	(28)	(8)	169	7,882
㊳	全 10	—	—	—	5	15	28	70	19	9	(25)	(7)	146	8,028
㊴	全 11	—	—	—	5	21	32	41	24	7	(29)	—	130	8,158

出典：『鶴嶺女学校 40 周年記念誌』59 ページ。計・累計の数値は検算の上修正した。

二見：鶴嶺女学校について

表4 鶴嶺女学校・同高等女学校卒業生の郡市別統計（1898～1936）



出典『鶴嶺女子校 40 周年記念誌』60 ページ

学校の教育史的意義を考察したいというのが筆者の願いである。

注

- (1) 拙稿「鹿児島県中等教育史研究序論——女子教育を中心として——」〔地方教育史研究〕第四号 一九八三年五月、三〇一八ページ所収)を参照。
- (2) 昭和五十八年九月二十六日 筆者は鹿児島玉龍高等学校を訪問し、谷崎哲夫校長、吉留秀雄教頭のお導きで、旧鶴嶺女学校関係史料を閲覧させていた。
- (3) たとえば、元教員森川長憲氏は鹿児島市内に健在である。
- (4) 「鹿児島県教育史」下巻(昭和36年6月・鹿児島県立教育研究所)二二二ページ。
- (5) 「鶴嶺高等女学校・鶴嶺女学校」学校沿革史」(以下「鶴嶺沿革史」と略称)二二ページ。
- (6) 前記森川長憲氏の筆者宛書簡(昭和五十八年十月一日付け)に依る。
- (7) 前掲「鹿児島県教育史」下巻 一七六ページより再引。
- (8) 「鶴嶺沿革史」二〇三ページ。
- (9) 同上 三三ページ。
- (10) のち、東京実践女学校教師となる。川村と改姓。
- (11) のち、東京実践女学校教師となり又支那蕭親王の家庭教師に聘せられたが、北京にて客死した。
- (12) 「鶴嶺沿革史」三三ページ。
- (13) 同上 四三ページ。
- (14) 旧職員小松文雄の「創立四十周年記念式典祝辞」によれば、土持氏宅とは「鹿児島」市内千石馬場今ノ中村病院附近二個人ノ住宅ヲ借用シ」と説明されている(「雛鶴」第三十五号——鶴嶺女学校・鶴嶺高等女学校 創立四十周年記念誌——以下「鶴嶺記念誌」と略称——二二ページ)。
- (15) 「鶴嶺沿革史」五〇六ページ。
- (16) 「鶴嶺記念誌」九五ページ。
- (17) 同上 二四ページ。
- (18) 「鶴嶺沿革史」八ページ。
- (19) 「鶴嶺記念誌」九七〜九八ページ。

二見：鶴嶺女学校について

- (20) 同上 九七ページ。
- (21) 『鶴嶺沿革史』一〇ページ。
- (22) 『鶴嶺記念誌』二七ページ。なお、『沿革史』の方には寄贈額が三百余円と記されている。
- (23) 南日本新聞社編『郷土人系』中 一四七ページ。
- (24) 『鶴嶺沿革史』一一～一二ページ。
- (25) 鶴嶺高女同窓会『鶴嶺高等女学校・鶴嶺女学校 沿革大要』（昭和五十七年十月現在）による。
- (26) 『鶴嶺沿革史』一二～一四ページ。
- (27) 同上 一七～一八ページ。
- (28) 同上 一二ページ以下。
- (29) 同上 一四～一五ページ。
- (30) 同上 二三ページ。なお、大正二年三月段階では「校舎四二〇坪」である。
- (31) 『鶴嶺記念誌』三三ページ。
- (32) 同上 九八ページ。
- (33) 『鶴嶺沿革史』一五～二〇ページ。
- (34) 同上 一八ページ。
- (35) 技芸科第二部の第一回卒業生（四五名）にあたる。川辺ナヲは古川と改姓、国分市数根に、野元サトは二見と改姓、始良郡溝辺町有川に、共に健在。
- (36) 『鶴嶺記念誌』八ページ。創立四十周年記念式典における屋代熊太郎（公私立女子中学校代表）の祝辞。
- (37) 『教育報知』明治三十二年七月二十五日
- (38) 『教育時論』明治四十三年十一月五日
- (39) 『鶴嶺沿革史』二二ページ。
- (40) 同上 二二ページ以下。
- (41) 第十七回卒業生数について、『鶴嶺記念誌』五九ページ所載の「創立以来ノ各科卒業生数一覧表」には 本科五五、研究科一、技芸科一部五五、同二部三九名とあり、『鶴嶺沿革史』との間に相違が見られる。両出典にはこの他にもかなりの異同がある。その根拠を今後検討する必要がある。
- (42) 『鶴嶺沿革史』二四～三四ページ。
- (43) 同上 三一～四七ページ。
- (44) 同上 二九～四六ページ。

- (45) 同上 四四〜四五ページ。
- (46) 『鶴嶺記念誌』八五〜八六ページ。
- (47) 同上 一四八〜一五〇ページ。
- (48) 鹿児島玉龍高等学校『玉龍三十年の歩み』一四ページより再引。
- (49) 『鹿児島玉龍高等学校創立40周年記念誌』および、鹿児島新報社『青春有情』 第三卷 一九二〜二〇三ページを参照。
- (50) 前掲『沿革大要』による。

〈付記〉 本研究は、実践学園による認定研究「高等学校に関する史的研究——鹿児島県を中心として——」(昭和56・57年度個人研究)の一環をなすものである。

(受付 一九八三・一〇・一七)